

世界的な大きな変化の渦中で

「Withコロナの時代に適した生活」という言葉をよく耳にするようになりました。全国各地での祭礼中止も続々と報じられています。昨年の今頃は、新型コロナウイルスという名称さえ聞いたことがなかったのですが、1年前には考えられなかったほど環境が大きく変化し、社会全体の動きも変わらざるをえなくなってしまいました。市民の皆様から直接お話しをお聞きする現地調査を活動の大きな柱としている常陸大宮市史の民俗部会では、とても困った状況になったと感じています。さらに心配なのは、ここまで続けてきた伝統的行事の行く末です。変化することを全面的に否定するわけではありませんが、意に反して突然変えざるを得なくなってしまうのは残念です。

これまでも、少子高齢化等による担い手不足や後継者不足など、伝統行事を継続するにあたっての課題は少なくありませんでした。民俗部会が昨年7月に取材させていただいた鷲子山上神社夏季例大祭（鷲子のお祭り）の場合も同様でした。山車・屋台の運行は4年に1度になり、内容も時代に応じた縮小化が続いてきています。



大津 忠男 氏
民俗部会長
茨城県立歴史館 学芸課長

そのような中で、昨年の当番になった地区の人々は、現実的問題に正面から向き合いながら、「伝統的祭礼とは何か」「祭礼継続のための諸問題を解決するにはどのような方策があるのか」を考え抜き、これまでとは違った祭礼プログラム（運行予定表）を創り上げました。その概要をこの3月末に発刊された『常陸大宮市史研究』第3号に＜資料紹介＞として掲載させていただいています。多くの問題を抱えながら祭礼を実施している他の地域の参考になることを期待しての報告です。

執筆当時、新型コロナウイルス感染症の問題は起きていませんでしたが、行事本来の意味やあり方と現実の課題を考え合わせ、より理想的な形で実施しようとする姿は、祭礼に限らずあらゆる生活の場において参考になるのではないかと考えています。



▲令和元年 鷲子山上神社夏季例大祭



▲屋台が並ぶ様子

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）